

区分	世帯数	男	女	計	転出	転入	出生	死亡
赤馬場	537	1,071	1,244	2,315	14	4	0	2
中原	313	766	851	1,617	10	1	4	0
満願寺	547	1,227	1,328	2,555	6	4	1	0
計	1,397	3,064	3,423	6,487	30	9	5	2

# くにみなみ報

昭和40年11月13日第3種郵便物認可

第72号

昭和44年10月1日

毎月1日発行 1部 5円

発行所 阿蘇郡南小国村役場  
 TEL ② 1111  
 印刷 白石印刷美術株式会社  
 TEL ② 6812・4862

## 十一組の金婚 御夫婦を表彰

昭和四十四年度、本年で十一回目を迎える、熊日主催の金婚式が役場議場でおごそかに行なわれた。結婚後五十年と云う人生

# 金婚おめでとございます

の経験者を前に現代を語るのもおかしなが、本年は月面着陸と云う記念すべき違業が残された。人類の無限の力と云うか、科学の進歩による結果は皆さんも新聞テレビでも御承知の通り宇宙時代を目前に地球はますます小さくなってまいりま



熊本日新聞社により表彰する

した。当村内においても自動車や耕耘機がのき並に浸透し、遠かった村や町が近くなり、このような文化生活が今や農村の姿を変えんとしている。今後はおいっそうお体に気を付けて、後輩の指導若さでもって、後輩の指導鞭撻をよろしく願います。

本年金婚式を迎える皆さん



井上 豊喜氏 夫婦

佐藤 梅吉氏 夫婦

井 順市氏 夫婦

北里 肅氏 夫婦

北里 近造氏 夫婦

河津 林氏 夫婦

堀川 光磨氏 夫婦

武田 立吉氏 夫婦

石田 光喜氏 夫婦

石橋 茂夫氏 夫婦



河津 珍市氏 夫婦

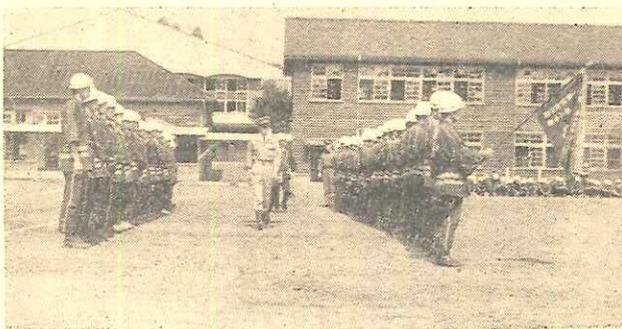
## 消防点検行なわる

南小国中学校校庭

昭和四十四年度消防点検が去る、九月九日、南小国中学校校庭で行なわれた。現在村内には次のように小型動力ポンプが配置されている。第一分団(大字赤馬場地区)四台、第二分団(大字中原地区)四台、第三分団(大字満願寺地区)十一台、合計十九台、となっている。又機動分団において消防車一台配置されている。この日は団員と共に機械整備、能力など非常にそなえて機能を発揮しうるかと云うことを点検することであり、団員において、規律訓練競技、機械においては一勢放水、又日赤の献水運動にも参加し、昨年度よりその成果を上げて



規律競技第三分団



本点検を受ける第2分団

国鉄の万国博観光団募集のお知らせ  
 明年三月より九月迄大阪で開催される万国博見学の募集を熊本駅で行っています。熊本駅を阿蘇号又は明星号で出発し大阪駅又は新大阪駅下車、万博を一日半又は二日見学し京都、奈良又は白浜温泉か、京都名園めぐり・伊勢二見・比叡山琵琶湖・山中温泉等行程は四泊五日、一人当り費用は二六、七〇〇円から三二、六〇〇円迄宿泊料を含んでいます。早目に申込み下さるようお願い致します。各自で万博を見学されても知人宅以外は宿泊は絶対ありませんので見学される方は次へ申込みくださるようお願い致します。熊本駅長室上里助役へ

秋の交通安全運動  
 昭和四十四年度秋の交通安全運動が、十月六日より十五日まで十日間行われますが、十月一日より五日までの期間を準備期間として、十月六日より本格的な協力をお願い致します。すでに村内においても連送会、業者、森林組合、農協、郵便局の方々に御協力を得て、安全運転、安全歩行のため中央白線、横断歩道線、追越禁止線等の安全施設に協力してもらい完了いたしました。又期間中は農協有線放送により、一日一項目を目標に一件の事故も出さないよう呼びかけ皆さまの建設的な協力をお願い致します。

十一月一日から南小国町が誕生します  
 久しい間呼びなれてきた南小国村の呼び名も、十一月一日から「南小国町」と変わり、感がいも新たに将来に向けて第一歩を踏み出すことになりました。「村を町にしてはどうか」、いわゆる町制の施行については昨年の十二月町村議会に始めて提案がなされた。か月の月日がたちました。その間、議会は「町制施行準備特別委員会」を發足させ、執行部と手を相たずさえて、その目的達成のために、研究と準備を進めてきました。そして、七月二十九日の官報に南小国町とすることについての自治大臣の告示がなされ、十一月一日から実施されることになりました。この、村を町にすることについての趣旨については本紙に登載するとともに、有線放送、組長さん方の会談などをおして、お知らせいたしましたのでご承知いただいていることと思っております。村が、町となることは最初にして、最後のものではあります。最後のものではあります。ささやかながら記念の式典が考えられています。このことについては、村内各団体とご相談して決めることになっております。本紙の発行までには間にあいませんので、その詳細については別の機会にお知らせしたいと思います。

- 戸籍明暗
- (明)
    - 堀川真奈美ちゃん 八月 十六日 中湯田
    - 中島貴美代ちゃん 八月 十七日 滝下
    - 北里千栄美ちゃん 八月 二十一日 上町
    - 白石 長美ちゃん 八月 二十一日 白川
  - (暗)
    - 桑原今朝松さん 78才 八月 二十六日 馬場上
    - 室原農夫蔵さん 73才 八月 二十九日 本町
    - 村上 コメさん 72才 九月 二日 波居原下
    - 佐藤タマコさん 61才 九月 五日 吉原
    - 高野 タメさん 75才 九月 八日 陣内

# 夏の屋久島紀行

後藤元次



天然記念物カジマル

林業に心を示す人の誰かが望んでいる。鹿兒島港から南方百五十キロにある南海の秘境といわれる屋久島は、いま離島ブームに乗り島を訪れる観光客の数は年毎に記録を更新している。そのうち屋久島へ一行六人は渡るとした。

真夏の太陽キラメク鹿兒島港を定期船屋久島丸が出航してから五時間半、あざやかな海の青さの中にくっきりと浮ぶ緑の島がグングン近づいてくる。船は島の北玄関宮之浦港に入る。灼熱のよりの人波は乗降客と送迎のバスで賑わっている。カラフルな若い女性の姿がいかににもブームの中の観光地らしい。出迎えてくれた管林署員K氏の先導でタクシーは点々舗装してある道路を東海岸の方に迂回して安房へ向う。暫らくして高校の前を過ぎると左方に屋久島空港の小さなビルが見えるやがて安房に着く。安房は屋久島の東海岸の港町、下屋久島管林署の所在地で山から素材をトロッで搬出する屋久島杉貯木場がある。K署員の舎宅で休憩をとって用意のタクシーに分乗して安房林道へさしかかると山の麓を右に折れ左へ迂回ながら次第に登っていく。右の彼方に海を隔て、種子島が細長く横たわっている。

眼下の安房町が林間に見えかくれて次第に遠ざかるうちに車は人工林を過ぎて峻険な山腹を辿って原生林の中に入る。雑木に交った杉の木が見られる。干古以来きびしい風雪に耐えてきた屋久島の杉の枝葉の形態は本島内地の杉を見ながらいる観光客に異様な感をおたえる。安房川渓谷、原生林荒川ダムに涼味をそよる。林道の終点で下車。安房からこ、まで十六キロという休んでいると山腹を削って敷設された軌道を下の方からコトコトと登ってきたトロッに乗る。一日の作業を終えて我が家に帰る管林署就業員の男女十数人が乗って山の上の生活に生甲斐を持つ人の表情はいかにも明るく屈託のない健康そのものである。トロッは管林署関係者の足であって山林作業の往復は勿論のこと麓の安房町へ家族の者が買出し所用にも利用されている欠くことのない唯一の交通機関である。トロッは小杉谷管業所前まで停車。事務所内にはこの道十六年という経歴の事業所主任がおられつくり山の話の何う。

屋久島は昭和三十三年三月、霧島・屋久島国立公園になったが九州最高峰の宮之浦岳(一九三三メートル)をはじめ千メートル級の高峰が三十余りありと並び「南海の洋上アルプス」と呼ばれている。またサルやシカなどの動物も多く、海岸線には熱帯・亜熱帯樹が茂り、山には高山・亜高山植物が成育するといつたが、あいで動物や植物研究者の来島もふえているという。事務所内に大木を輪切りにして立て、ある年輪材が目を見れば、中心部から百年目毎に打たれている釘の数が十六本あって樹令十六百年というに驚かす。

小杉谷附近は管林署就業員の住宅や寮が立並んだ谷間の小部落であって中央に小学校がある。附近に団体登山者のために設けられた七十人を収容出来る小杉谷宿泊所がある。事業所主任の好意によって今晩は主任宿舎に泊る。

翌朝夜明けとともに起床。標高九百メートルにある山の冷気が肌を刺すすがすがしい。天候晴れわたる今日の登山には好適だと思われた。

営業所前からトロッで八時に出発。林用軌道を快適に走る音が静かな空気を破って谷間にこだまする。途中に三代杉がある。小杉谷から六キロの所で下車。これより原生林帯の中を登る。木の根による階段に空間に架けられた梯子、岩石伝いの這い登るような足がかりで容易でない。標高千メートルの所にウイソクソク株がある。地上数メートルの株の切り口周囲十三メートル、これより登って大杉がある。この杉の根元に大きな空洞があつて数人の人が楽に入れる。次に手さしにのびてつないだ格好の夫婦杉を見る。この附近を通り過ぎて林間の開けたところから宮之浦岳が偉容を現わして見える。署員の話には一年中でこんなに晴れて良く見える日は珍らしいという。又五月頃にはシヤクナゲで花一ぱいの美麗な姿を見ることが出来るという。更におおわれ薄気味悪いほどの姿で、立つ大杉に辿りつく。島には大変な長杉がある。という言い伝えをたより数年前がかりで捜し出したもので、九州大学の真鍋大博士が生長曲線を電子計算機にかけて樹令を調べたところ七千二百年の答が出たので発見者との名を一字とって「大杉杉」と名づけたとされている。標高千三百メートルの所にこの杉は人の胸の高さのところで周囲十六・一メートルもあり、「現存木ではおそらく最長老の杉の大木」とあって観光資料に貴重されている。又管林署の人は縄文時代のものというから縄文杉とも呼んでいる。ここで同行者のうち郵便局員二人(年間の休暇を登山に消化しているという山のベテラン)と高校生は別れて宮之浦宿泊所に向った。引返して山を下る途中ウイソクソク株について頃天候急にあやしく変わり雨の降りが降り出した。持参のビニール風呂敷を被って雨を除けながら山を下る。西海岸は原生林に覆われた断崖絶壁の土地を開き、最近漸く開通したばかりの新しい道路である屋久島観光一周のこの西海岸線の開通で可能となったわけである。午後一時永田に着く。永田は島の西北に位置する町で、九州第二の

にはクワズイモ、ハマユウ、タニワタリ、ヘゴ等の珍らしいものが自生している。夕方海水浴場に出る。過密地帯といわれる都市周辺の海水浴場が大腸菌で汚されているのに比べて何と海水の綺麗なことであろう。浜辺に打ち寄せられた花崗岩の砂はまことに美しい。松林の中にテントを張ってキャンプを楽しむ中学生が水平線の彼方に太陽の沈むまで海中で遊ぶ姿が印象的である。

翌朝タクシーで一淡へ向かう。一淡の港は内海深く島内唯一の良港といわれる。照りがよく暑熱の棧橋には船の入港を待つ多数の人が群れている。間もなく入港の折田丸に乗船。これより船は一路鹿兒島島に向かう。最近屋久島の原生林保存の世論が大きく波紋を描いて各方面から現地調査に来島しているという。これも至極当然のことだと思つた。屋久島の宿命であった屋久島の本命である屋久杉の姿に接することが出来た。最近、三泊四日の快適なコースを遊んでくれた管林署の事業所主任とK署員に感謝と多幸を祈念して擧筆したい。

昭和三十四年度(第二十二回)赤ちゃん大会を七月二十三日に実施しました。入賞者は次のとおりです。

**赤ちゃん大会 入賞者発表**

昭和三十四年度(第二十二回)赤ちゃん大会を七月二十三日に実施しました。入賞者は次のとおりです。

**乳児の部**

一等 齊藤智之 荒倉上  
二等 下城卓也 矢津田上  
三等 松本真美 瓜上住宅  
森口 満 新町一  
毛利智子 米山上

**幼児の部**

一等 室原淳司 中杉田一  
二等 鈴木久子 動目木  
中島美由紀 滝下  
三等 高原正純 上町一  
後藤栄子 杉田上

努力児 志津下 二宮清志 以上

血液 センターから

「市町村内で必要な輸血の血液は市町村民の手で」というキャッチフレーズで国の方針に則つた愛の献血助け合い運動が、県衛生部の積極的な推進と同時、各市町村では、市町村民の生命維持のため当局の責任ある運動として、最近強力に打ち出されてきました。

且つて、売血から献血への過渡期にあつて血液センターでは、役場、学校、事業所や各種団体等に呼びかけて、献血源の開拓に仕事を大半を傾注して来ました。最近に至つては市町村の積極的な献血PR、並びに組織活動、献血計画の樹立等によりまして、厚生省から指示された通り、献血の採血、保存血液の製造及びその供給という血液センター本来の仕事に専念出来るようになって来ました。

最近、交通事故を初めとして、是非共血液を必要とするような不幸な災難が毎日毎日絶えず県内一日に一〇〇本(一本二〇〇ml)から一五〇本位の血液を各医療機関の電話要請に応じて救急車で運んでおられます。

貴重な身体の一部である血液を無償で而も貴重な時間をさいて奉仕下さる献血者の善意に對して、私共は心から敬意を表すると同時に、如何にすれば血液を最も有効に、最も迅速適格にこれを必要とする患者さんの下に送り届けることが出来るかという点について最大の緊張を以て望んでおります。

輸血の必要な患者さんにとつては、その血液に関する限り、寸分の誤りがあるても生命にかかわるような問題となります。一刻の猶予も、一滴の不足も許されません。然しながら輸血によつて愛の血によつて、沢山の人の生命の灯が再び世に灯もされることを思うとき、私共は献血の貴さ

意義深いことを痛切に感じさせられます。古くから、血は命なり、と云ふ諺がありますが、私共は母親の愛の血が流されて此の世に生を得て来た。そして万が一の場合はお互いが生きるために、血を出して助け合うように宿命付けられております。そしてその助け合いは親子兄弟でも血液型の関係でこれが出来ない場合が沢山あります。

広い人間社会の神秘的な血の繋がりと、相互扶助を絶対に必要とする社会連帯の責任感を、今更ながら喚起しないではおられません。隣人愛とは、血を与えん愛である、人間の尊厳は血を与え合うことの出来る点にあると云う人もあります。

皆さん、一生を通じて、私達が、また私達の家族がいつどこで血液を必要とするような災難に合うことがないか誰か保証出来まじょう。私共が献血が出来ると云うことは現代の我が身の健康を保証すると同時に将来の健康保持のための大きな支えと云うことが出来まじょう。お互いに今日の健康を喜び合い明日の健康を守るために町を挙げての献血運動に進んで協力いたしまじょう。

なお本年午ら日頃の御協力を感謝いたします。(熊本県赤十字血液センター、開倉)

行政相談週間の実施

十月十二日より十月十八日迄「行政相談週間」の期間です。国、県、村等の苦情処理について相談のある方は行政相談委員へ御相談ください。

今迄の解決事例は、Aさんの夫は軍人恩給を受けていたが二年前夫が亡くなつたから二年恩給が送られただけでその後なんの通知も送金もありませんでした。

そこでAさんはどうなっているか調べてみようと思つた。夫の恩給関係の書類を探しましたが、どこにもみつかりませんでした。困つた

Aさんはなんとか恩給がもらえるようにしてほしいと行政監察局へ申出ました。このような話に限らず役所などかたしてもらえないものかというふうなあなたの疑問や不満や困りごとは遠慮なく行政監察局から村の行政相談委員に申出下さい。

今の話は次のように解決しました。

申出を受けた行政監察局はさっそくその旨を恩給局に通知しました。恩給局では直に調査して恩給を支給するようにしました。このことは本村の事ではありませんが行政監察局も行政相談委員も無料で、しかも秘密を守つてこのように相談のつてくれます。明るい生活をおくるために大いに利用いたしまじょう。

行政相談委員は本町の加藤ウキ氏です。

ポストー 標語募集

来年の二月一日に行なわれる一九七〇年世界農林業センサスの標語を募集いたします。傑作をお寄せください。

▲ごぞんじのように、いま日本の農業は近代化をめざして大きく変わつてきています。そして他の産業や都市の人々の生活に負けない、魅力のある農業を創り出すための努力が農家をはじめ、多くの人々の間で毎日つづけてられています。

▲一九七〇年世界農林業センサスは、激しく変わつてゆく日本の農業と農家の姿を正確にうつしつて、日本の農業に正しい進路を与えるために行なわれます。

▲また、このセンサスは国際連合の規模で行なわれ、国際比較の資料ともなります。

▲力強く、より豊かな農業への羅針盤、それが農業センサスだ。ともいえまじょう。

▲このセンサスに農家一戸一戸の皆さんの協力が得られるよう、傑作をお寄せ下さい。

▲応募規定

応募資格 制限なし  
応募作品 未発表のもの  
用紙 官製はがき  
一枚一句(応募枚数は一人三枚まで)  
送り先 熊本市二の丸 熊本合同庁舎内 農林省熊本県統計調査事務所  
締切 昭和四十四年十月十日(同日付印のもの有効)

発表 審査は十月二十日までにない入選発表は十一月の「農林統計調査」「農林時報」「町村週報」統計通信で行ないます。尚、本人には別に通知します。

褒賞 入選された方には次のような賞をお贈りします。

一席 農林大臣賞  
一名 副賞三万円  
二席 農林統計協会賞  
一名 副賞一万円  
三名 賞金五千元

佳作 記念品 若干名  
版權 農林省統計協会に属します。

主催 財団法人 農林統計協会  
後援 農林省

香典返しに 寄附

波居原の村上コマさんの死亡により御息の村上秀春さんより金一封が波居原小学校へ香典返しに寄贈されました。